

ト ラ ッ ク 5 歪んだ憧憬

(SE: 間諭ナヘ)

(SE: 間諭モヘ)

(SE: 旦那)

「あ、先輩。もう来てたんですね。

約束の時間まで随分残つてゐるのに……ふふ。

そんなに楽しみにしてたんですか？私達の密会……。

それとも……。」

「私に弄られるのが待ち遠しかつたんですか……？」

「ふふ。先輩の反応には飽きないなあ。

つい意地悪したくなります。

まあ、戯れはここまでにして……。

そろそろ溜まつてないんですか？性欲。

ふふ。顔を赤くしちやつて。良いんですよ？

年頃の男の子なんですもの。仕方の無いことなんです。仕方の無い……。

最初から言つてますが、先輩の性欲管理は私の役割です。

仕事に障らないように、確実に絞り出してあげますよ。

あ、今日はちょっと違うのかな。正確には、私じゃないんです。

理解に苦しむお顔ですね。ふふ。

前に言いましたよね？私の秘密を教えるつて。

今日にしましよう。

ちゃんと見ててください、先輩。

人に見せるのは、初めてですか？」

(SE: まー、綺を奈ハル)

咲

「どうです？先輩。

いや、この姿では違和感があるな。言い方も変えた方が良さそう。

外見だけでは、私の方が年上になるから……。

君、にしよう。ふふ。

どう？この姿。胸も大きくなつたし、お尻、だつてムチムチになつたんだ。

触りたくなるでしよう？

状況が理解出来てないようだね。ふふ。まあ、無理もないつか。」

(SE: 周りを歩く)

咲

「カウンセリングでは隠しておいた事実が幾つかあるんですね。

これがその一つ。

スカーレット・ウイツチーズ。彼女達に監禁された際、本当は身体改造の手術を受けていてね。

そのテクノロジーによつて、このように成長した姿になれるようになつたんだ。勿論、それにも限界があつて、長くは維持出来ないけど……。

私の願望を叶えるには充分だから、別に良い。

ふふ。驚いた？私にこんな能力が宿つたのこと。

それとも、彼女達に身を委ねたこと、なのかな？

世界つて面白いよね。思い出してご覧なさい。自分の身に起きたことを。

親しい後輩にしか思つていなかつた女の子が、最近になつていきなり自分を支配した挙げ句、今になつてはこんなエロい体のお姉さんになつて見下しているのよ？ふふ。

あら。複雑な顔をしてるね。どうしたら良いか、迷つてゐる……。迷うことは無いのよ？それより……。」

「折角得た私の新しい体……。

試してみたくない……？

この体なら、色々なことが出来るのよ？

咲

熟れた果実のようなこの体なら、君の望む全てのファンタジーに答えられるわ。

想像してみて。このお胸で何が出来るかを。

お尻だつて大きくなつてね。敷かれたいとは思わない?

きつと気持ち良いんだろうさ。分からぬけど。

想像の中にしか存在しなかつた、理想のお姉さんとの甘い一時。」

「ふふ。もう顔がとろけてる。そう。それで良いのよ。

いつものように、私に体を委ねなさい。

楽しみはこれからよ。

ではまず、こつちから頂こうかしら。」

(キス)

「あら。キスしただけなのに、目がとろんと。

徹底的に絞り出したつもりなのに、未だ快樂に弱い。

上司としても、男としても。笑っちゃうわ。ふふ。

ほら、しつかりしなさい。楽しみはこれからよ。」

(SE: 脱衣)

「ふふ。もう我慢汁で塗れてる。

やつぱり、お姉さんからのキスは、刺激強すぎたかしら。

初めからこうなんじや、果たして、最後まで行けるのかな。
じゃあ、私も……。」

(SE: 脱衣)

「嫌らしい。待ち焦がれていたかのように目を大きくしちやつて。

そんなに気になるのかしら。ふふ。

さあ、先から見つめていた、お胸よ。

元の姿でも小さい方ではなかつたけど、こつちの方が良いでしょ?

片手では握り切れない程の大きさに、力を入れるまま受け入れる柔らかさ。

触るだけで幸せ過ぎて気絶しちやうかも……。

まあ、あくまで触れるなら、の話だけど……ふふ。

その手で私に触れるなんて、十年早いわ。

大人しく私の手の中で弄ばれなさい。

それだけで、身に余るわよ。」

(胸で性器を包み込む) (SE: 肌で触れる)
(SE: パイズリ : 普通の速め)

「あら、おちんちんが消えちゃつたわ。

ちつぽけで、最初から我慢汁垂れてたダメなおちんちんはどこなんだろう？
どうせ、女一人満足させない程度のおちんちん。この際、無くしたつ
て良いでしよう？どう思う？」

(SE: パイズリ : 普通の速め)

「うん？ 体が震えているな。

具合でも悪いのかしら。

私？ 私はただ、お胸を揉んでいるだけなのよ……？ふふ。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

ここまで大きいと、何と言うか……。

面積が広くて、疲れちゃうわ。

力を入れすぎると痛いから、円を描くように優しく……。

ふふ。何。私の動きに合わせて、声を出しちゃつて。

君に何かをしている訳でもないのになあ。気持ち良いことでもあるのかな？
まさか、お胸を見ただけで興奮しちゃつた？

全く、救いようも無い変態ね。

そんなにお胸が好きなら、存分に見てなさい。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

力を入れて、上下に……。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

力を交差して、上下に擦れるようになに……。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

うん？お胸の間に何かあるようだね。

小さくて良く見えないけど……。

何だろうね。ねえ。君はどう思う？

あら、もうとろけた顔しちゃつて。

そんなに私のお胸が気に入つたかしら。

見るだけで感じるのは、みつともない。

ふうん。何だろうね。いつそ潰しちゃおつか。

えいつ、えいつ。

へえ、予想外に堅い。

もつと力入れてみよつか。」

(SE: パイズワード)

咲

「ふうん、どうしても潰れないなあ。

意外にしぶとい。

うん？ふふふ。君、何してるのかしら。
目の前で腰を回しちゃつて。

先から動いているのよ？知らなかつた？本当、みつともない。
気持ち悪いから止めて貰える？

今、お胸の間に挟み込まれたものを潰しているから、大人しくしてなさい。
君なんかに構う時間など、無いわよ。
では続けて……。

えいつ、えいつ。

何か零れだしてきたようだけど。そろそろ潰れるのかな。

良し、この勢いで。えいつ、えいつ。

壊れてしまえ～。潰れてしまえ～。」

(SE: 射精)

咲 「あら、お胸に温い液体が……。

壊れきつたのかな? どれどれ。

ああ。ふふふ。何よ。ちっぽけで女一人満足させない早漏のダメちゃんちんじやない。

見えないとthoughtたら、お胸に挟まれていたわ。

流石は君のおちんちんだね。お胸が好きみたい。ふふふ。

見付けて良かつたね。こんなおちんちんでも、男の象徴なんだから。さて、見付け出してあげた私へのお礼は?

さあ、言いなさい。

『お姉さん、ありがとう。ちっぽけで早漏の僕のおちんちんを見付け出してくれて。』

ふふふ。恥ずかしくないのかしら。

男としてのプライドなんか、これっぽつとも無いみたい。

おつと、いけない。休ませないわよ?

普段ならこの辺で終わりだけど、今日は違う。

重要な話もあるし。

そろそろ、君に首輪をつけなくちゃ。

ふふ。どうやらおちんちんもその気になつてゐみたい。』

(男性器を太ももに挟む) (SE: 肌に触れる音)

咲 「どう? おちんちんが太ももに挟まれた感触は?

お胸とはまた別格でしちゃう?

柔らかくてプリプリした感触。

ふふ。ヨダレ垂らしているわよ。

口もつぐめない程乱れるなんて……全く向上心なんて無いわね。

挟まれただけでこれとは……。

本番はこれからなのにな。」

(SE: 素股: 補遺の呼び方)

咲

「太ももでおちんちんを撫でられる気分はどう?

両足のぶりぶりした肉に挟まれて締められる圧迫感。まるで、本物のセックスでしょう?

ある程度は、本当よ。気付いてるでしきう?

太もも以外にも感じられる、気持ち良さ。

そう、パンツの感触よ。

当然よね。太ももの上は、あそこだもの。

女性にとつて、最も大切なと。また、一番気持ち良くなると。

お・ま・ん・こ。

ことの大しさが分かつた?

薄い布一枚を挟んで、私のおまんこが君のおちんちんに触れてるのよ?

私のあそこと、君のダメちんちんが擦れ合つてるわ。

ふふ。嬉しい? 幸せ? 感激かな?

そうよね。君なんかにここまでしてくれた女なんて、無かつた筈。」

「そう言えば、結構時間が経つてるなあ……。

あの時の告白の答え。まだ聞いてないわよ。

ふふふ。滑稽だわ。

快樂に陥られて、あほ面になつて、恋人になつてくださいだなんて……。

告白にしちゃ最低だわ。今の言葉、どの女性にだつて断れるわよ?

勿論、私にも。

ああ、そんな悲しい顔しないで。

だつて、そうでしよう？

私と君の関係は、あの時とは違う。

同位の恋人関係になんて、今更なれるとと思う？

現実を見なさい。

前にも言つたよね。君の立場は、オモチャ。或いは、奴隸に過ぎない。
そう思わない？ふふ。そう。理解が早いわね。

なら、もう一度言つてごらん？今の立場を踏まえて。」

「ふふふ。そう。そうでなくちゃ。

ダメな自分を認めた上で自らを屈めた、醜く悲惨な告白。

ちゃんと聞き取つた。見事だつたわ。こつちの胸までゾクゾクする程。
その通り。君は私の捕虜なのよ。

いつでも弄べるオモチャであり、私の気分次第に扱える奴隸であり、
私の為に命も落とせる隸(しもべ)。それが君なのよ。

体が蠢いている。まるで痙攣でもしているようだわ。

自分の立場が動物以下になつてゐるのに興奮するだなんて。

全く、変態マゾは度し難いな。

だつて、それが気持ち良いんでしよう？ふふ。」

「ところで、私の為に働くのが何を意味しているかは分かつてゐ?
まあ、気持ち良さに頭をやられて、分からぬのかしら。

じやあ、特別にお姉さんが教えてあげる。

私の為に働くのはね。」

「スカーレット・ウイッチーズの為に働くことなのよ。

つまり、裏切ること。

だつて、私はもうスカーレット・ウイッチーズの幹部としてここにいるのよ？」

「ふふふ。その表情。見物だわ。

表面上、抵抗すべきなのに、抗えない気持ち良さで心と体が別になつてゐる。

咲

咲

咲

咲

これじや、壊れたお人形だね。ふふ。

さて、私に抗い切れるのかな？

もう私からの快楽に陥られて、私無しでは生きていけない君に。

無理よ。女体に無防備な君には、到底。

まさか、耐え切れると思つてる？

ふふ。面白いことを言うじゃない。

君なんか、私の気分次第では……。」

(SE: 紋股：卑下)

「ほら、どうかな？大口叩いておいて、結局は？

表情が全て語ってるわよ。

打ち上げてから十秒も経つてないのに、目が振るえてる。

それに、顎を伝うヨダレ。

分かつた？

無意味な抵抗は止めて、受け入れるのよ。

カウンセリングの初日。絞れ出されたあの瞬間から全ては決まつっていた。

快樂を注ぎ込んで、君の心を毒した。

性欲処理を名目に、私好みの糸を繋いだ。

気付かないまま、性欲に目が眩み、快樂を求めるようになつた君は、私の思うまま動くようになりつつあつたのよ。

残酷と思う？

怖い？

違うね。そうではない。

禁忌を犯す背徳感。

その気持ち良さを知つてしまつたからには、

これもまた、自分の性欲を満たす、一つの出来事に過ぎない。

そう。気持ち良さの為なら組織をも裏切られる程、クズに成り下がつたんだ。

ふふ。悲しむことは無い。空虚なその心は、私が快楽で満たしてあげるから。」

(キス)

(SE: 騒音)

「まあ、威勢の良いこと。

これまで一番多い量かしら。

それ程、気持ち良かつたんでしょう?

体は正直よ。

うん? ああ、流石に連続射精は憲りるのかな。

さあ、疲れただろう? お姉さんのお胸に顔を埋めて良いわよ?

優しく抱いてあげる。

そう、良い子だわ。

何も心配しなくて良いわ。

お姉さんは、君だけのものだから。ふふふ……。」